

## 特集

### ● 非行防止・立ち直り支援の学生ボランティア

## BBS活動の意義

たけ  
なか  
ゆう  
じ  
竹中祐二

(北陸学院大学人間総合学部講師)

### 一 はじめに

本稿では、はじめに、BBS会およびBBS活動について簡単におさらいしておきたい。それによって、本稿のテーマを確認しておこう。アメリカでは少年裁判所職員によって主導されたBBS会であるが、日本でのきっかけを作り、また発展を後押ししてきたのは何より学生の力である。BBS活動の基本は、文字通り少年の「おにいさん・おねえ

さん」の立場で行われること、また少年と「同じ目線」に立つて行われるべきことから、学生会員は何より欠かさない。BBS会における学生会員とはまさに、本特集のテーマである「非行防止・立ち直り支援の学生ボランティア」そのものであり、極めて重要な存在である。

そこで本稿では、学生BBS会員が活動することの意義について考えたい。つまり、かなり丁寧に言い換えてみると、本稿の狙いは、「学生」が、「ボランティア」の立場か

ら、「非行防止・立ち直り支援」に関わる意義について考える、ということになる。

## 二 「学生らしさ」を活かすために

社会人会員の場合は、登録・在籍してはいても実際に時間を作って活動に参加することが難しい、という現実的な制約がある。その点、課題や実習、学費を捻出するためのアルバイト等、ひところの大学生と比べるとその忙しさは段違いであるものの、それでも社会人会員よりも学生会員の方が時間の融通が利き易いであろうことは間違いない。そのため、会員比率のデータ以上に、実態としては学生会員がBBS会の中心的役割を担っているということになり、「BBS会は学生ボランティアだ」という説明のされ方が多くなされている。しかし、そのせいで、「学生だから」／「社会人だから」という二元論に陥るといふ問題が一部で生じている。筆者自身の約一〇年のBBS活動歴の中でも、この対立構造に遭遇することはしばしばあった。対立と言っても、何も頭ごなしに社会人会員が学生を押しさえよ

うとしたり、学生会員がそれに強く反発したりする、という激しいものばかりではない。「学生会員の思う通りにすれば良い」と社会人会員が遠慮したり、「自分達は知識も経験も欠けた存在だからどうせ意見は通らない」と学生会員が遠慮したり、という形で現れることも少なくないのだが、いずれにしても思考停止状態である。両者の区別とは飽くまで（BBSを離れた）本分が何であるかの違いに過ぎない。学生であろうと社会人であろうと、BBS会員として大切にしなければならぬものがあつて、より良いBBS活動のためにそれぞれ対等の立場で、かつそれぞれの良さを活かしていかなければならない。そのために、「学生」という立場であることから導かれる強み・弱み、社会人との比較から浮かび上がる学生の強み・弱みを考えて、「学生らしさ」というものを問い直してみることとしよう。

既に述べたことであるが、学生ならではの強みとして何よりもまず、時間的余裕が挙げられるだろう。実際に活動ができなければ意味は無いからである。また、年齢という要素も挙げられる。ほとんどの学生は一〇代後半から、大学院生まで含めても二〇代前半である。少年の立場からす

れば、相手がいかに自分に対して親身になってくれるとしても、「同じ目線」で物事を考えてくれるとしても、年の近い「おにいさん・おねえさん」に身近な親しみを感じるのは当然だろう。さらには、学生という立場を活かして得られる人的・物的資源も大きな強みであろう。非行処遇や刑事政策から、活動の組み立てに必要なグループワークやレクリエーション等の方法論に至るまで、幅広い専門知識を講義から学ぶことができる。さらに、研修やミーティングを実施する、あるいは必要備品を保管するための場所が確保できることも大きいし、研修に関して言えば、幅広い領域からその道のプロを講師として呼び易いことも強みだと言えるだろう。

その反面、学生ならではの弱みとして、学域という性質上、社会人会員との接触が乏しくなることが挙げられる。過去の活動において何を行ったか、どういった理由からどういった判断を行ったのか、といった問題が起こりどういった対応をしたのか、といった資料を蓄積することは大切であるし、必要なことである。それでも、問題がいざ現場で起きたとき、実際に体験しているか否かは大きな違い

である。臨機応変に対応できる人材が少ないのは心許ないことであるから、それにより学生会員の不安感が募り、責任のとれないことはしないといった形で活動の規模や内容が縮小することも懸念される。

そして何より、会員の入れ替わりの速さは学生が抱える非常に大きな問題である。毎年入学・卒業によつて会員が入れ替わる学域BBS会では、必ず一年単位で運営体制を大きく入れ替えていかねばならない。仕事を覚えた頃に役職から退かねばならないこと、そうして十分な経験を積まないままに指導役割までも担っていかねばならないこと等、組織の不安定さは残念ながら弱みと見なすべきであろう。

もつとも、繰り返しになるが、大切なのは学生会員と社会人会員の優劣ではない。事実として学生会員が中心であるという前提の下に、いかにして学生らしさを発揮し、より良いBBS活動に活かしていくかということこそが大きな問題である。

### 三 「ボランティア」の難しさ

BBS活動の特徴として、次に「ボランティア」であることについて考えてみよう。そもそもボランティアとは一体どのように定義できるのか考えてみると、検討すべき論点がたくさんあつて非常に難しいと言われている。例えばボランティアの特徴として、創造性、先駆性、発見性、相互性、ネットワークング、継続性、専門性等の要素が挙げられるが、これらが全てのボランティアに当てはまる訳ではない。最低限の要素として、自らの責任において実践がなされるといふ意味での「自発性」、経済的な報酬、対価を目的としないといふ意味での「無償性」、自己や特定の集団という範囲を超えて広く社会の役に立つといふ意味での「公益性（公共性）」の三つを備えていれば良い、といった説明も多く見られるが、最近ではこれらの妥当性も揺らいでいると言われている。例えば「自発性」について、他人に勧められて軽い気持ちでボランティアを始めるということもあるだろうし、むしろ自発性とは活動を継続していく中で養われていくものだと考えられるからである。また、

ボランティアという語が（一）活動をする個人を指すのか、（二）活動をする組織・団体を指すのか、という違いがあるし、（三）個別具体的な実践活動を指す場合もあれば、（四）そうした活動を理解してもらつて、広く社会に普及させるような大きな動きを指す場合もある。ボランティアと一口に言つても、意図によつて適切に使い分けていく必要があるが、BBSの場合にはそれぞれ、（一）BBS会員、（二）BBS会・BBS連盟、（三）BBS活動、（四）BBS運動という語が対応している。

歴史的に見ると、ボランティア活動の原点は個人の自発性によるものであるが、継続性や安定性を図る、スケール・メリットを活かすといつた理由から組織化がなされるようになる。組織の規模が大きくなると、行政とは違つて、社会に広く影響力を及ぼす公共的な組織として機能するようになり、今日では特定非営利活動法人（NPO法人）のよつうに、自発性と公益性・公共性を備えながら、営利を追求しないもののサービスを有償で提供可能な形にまで組織を発展させるケースもある。日本BBS連盟も、平成二八年度からは特定非営利活動法人として新たなスタートを切つ

ている。こうした組織化には、一部注意が必要となる。組織化が進み大きな理念を共有することや、公的性格が強くなり、行政との関係が緊密になることは、逆機能として個人の自発性を制約することにも繋がりがかねないからである。実際にBBS会でも、「ともだち活動中心主義」や「更生保護機関への協力主義」を前面に打ち出すことで、組織としての安定性を保つためには個人にとって多少の不自由さがあっても枠組みを設けることが必要だという考えを推進したところ、会員数の減少に悩まされる時期もあつた、ということに注意が必要である。

#### 四 「非行防止・立ち直り支援」実践とBBS活動

最後に、個別具体的な実践活動としてのBBS活動の意義について考えよう。その前に、そもそもBBS活動の意義を考える意味とは何だろうか。ボランティア理解の一面については先に少し述べたが、ボランティアなのだから効果や意義などは二の次で、創造的・先駆的な活動をどんどん展開すれば良いという理解も成り立つ。確かに今日で

は対象を非行少年に限定せず幅広くBBS活動が展開されている。しかし、何をやっても良いのであれば、それでは一体BBSらしさとは何なのか、という問題に繋がりがかねない。そこまで大きな、本質的な問いにまで至らずとも、自分達の活動に意義が見出せなくなると、ボランティア活動には「ここまですれば良い」という基準が無いために、より一層自分を追い込み、精神的・肉体的に疲れ果て、辛さを抱え込む「自発性のパラドックス」と呼ばれる問題を生じさせる。これは責任感の強い人であればある程悪循環をもたらずと理解されているが、ボランティアとは概ね自発的に活動を始めている訳で、ボランティアに携わる多くの者がこの問題に悩み、苦しんでいるのではないだろうか。だからと言って「非行防止・立ち直り支援」を前面に押し出すと、今度はBBS会員への、少年に対して「直接」、「良い影響を与えられるような」働きかけ、関わりをしなければならぬというプレッシャーに繋がる。ボランティアであるBBS活動は本来会員個々の自発性によって行われるものであるが、プレッシャーを感じると活動から離れてしまうことになるだろう。それが会員減少の危機に陥っ

たことは既に述べた通りである。

そうした悪循環の輪を断ち切るためにも、BBS活動の意義を解釈しておくことは、自らの活動実践を客観的に評価できることに繋がる点で重要なのではないだろうか。例えば、個々の活動を通じて少年は自分で作業をする喜びや家族・周囲の人々への感謝の気持ちを呼び起こすことは、直接的に少年自身の変容を促すだろう。その際、「おにいさん・おねえさん」の立場で関わることも、少年のこれから進む人生の良いお手本を提示することになる点で、直接良い影響を与える機会となるだろう。グループワークになると一人ひとりの少年に与える影響力は弱まるかもしれないが、多くの人間が自分を受け入れてくれているという思いは少年へのエンパワメントに繋がるし、非行少年にとっては少しでも多くの社会参加の機会が提供されることが望ましい。そう考えると、バザーや矯正展、その他各種施設で様々な形でお手伝いとして裏方に回ることも、確かに少年と直接関わってはいないが、むしろBBS会員の手を借りるからこそ成り立つ機会であると考えれば非常に有意義な活動だと言えるのではないか。

BBS活動はこのように、多面的にその良さを評価することができる。これからも引き続き、実践と並行して研究者としてもBBS活動の魅力を一つでも多く引き出していきたい。

〈参考資料〉

竹中祐一 二〇一五a 「更生保護ボランティアとしてのBB

S運動の存在意義についての一考察」日本更生保護学会編

『更生保護学研究』（七）、一〇—一八頁

竹中祐一 二〇一五b 「更生保護制度の展開に対する一考察」

京都府立大学学術報告委員会編『京都府立大学学術報告 公

共政策』（七）、一四五—一五八頁

津止正敏・斉藤貞緒・桜井政成 二〇〇九 『ボランティアの

臨床社会学 あいまいさに潜む「未来」クリエイティブかもが

わ

内海成治・入江幸男・水野義之（編著）一九九九 『ボラン

ティア学を学ぶひとのために』世界思想社